

## 『グレート・ギャツビー』における「夢」の二重性

大野 真\*

### 1. 資本主義の精神と禁欲的努力

本論考ではF・スコット・フィッツジェラルドの長編小説『グレート・ギャツビー』(1926年)を論じるが、その導入として、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』とベンジャミン・フランクリンの『フランクリン自伝』とを扱いたい。

まず、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下『プロ倫』と略)は、近代資本主義の誕生にピューリタニズムの倫理が大きな役割を果たしたことを明らかにした名著である。

ヴェーバーは資本主義の「精神」を明らかにするにあたって、フランクリンの言葉(「時間は貨幣だということをおぼえてはいけない」など)を引用し(40-43)、そこに現われた「倫理的な色彩を持つ生活の原則」に資本主義のエートス(ある民族や社会集団にゆきわたっている道徳的な慣習・雰囲気)を見て取る。

フッガーの場合には商人的冒険心と、道徳とは無関係の個人的な気質の表明であるのに対して、フランクリンの場合には倫理的な色彩を持つ生活の原則という性格をおびている。本書では、「資本主義の精神」という概念を、このような独自の意味合いで使うことにしようと思う。また、その場合、資本主義が近代資本主義であることは言うまでもない。なぜなら、本書で論じようとしているものがもっぱらこの西ヨーロッパおよびアメリカの資本主義だということは、問題の立て方に照らしても自明なことだからだ。「資本主義」は中国にも、インドにも、バビロンにも、また古代にも中世にも存在した。しかし、後に見るように、そうした「資本主義」にはいま述べたような独自のエートスが欠けていたのだ。(45)

ヴェーバーはフランクリンが「一切の自然な享楽を厳しく斥けてひたむきに貨幣を獲得しようとする努力」、いわば貨幣獲得における禁欲的な努力に注目する。そこにおいては、貨幣の獲得が「自己目的」的な性格を持つのである。

自伝に現われているベンジャミン・フランクリン自身の世にも稀なる誠実な性格だとか、さらには善徳が「有益」だということが分かったのは神の啓示によるので、それによって、神は自分に善をなさしめようとしておられるのだと考えていることに照らしても、そこに示されているものがひたすらな自己中心的原理の粉飾などではないことは明瞭だ。そればかりか、この「倫理」の「最高善」(summum bonum)ともいうべき、一切の自然な享楽を厳しく斥けてひたむきに貨幣を獲得しようとする努力は、幸福主義や快楽主義などの観点を全く帯びていず、純粋に自己目的と考えられているために、個々人の「幸福」や「利益」といったものに対立して、ともかく、まったく超越的なまたおよそ非合理的なものとして立ち現われている。営利は人生の目的と考えられ、人間が物質的生活の要求を充たすための手段とは考えられていない。(47-48)

また、労働に対する考え方にも、こうした自己目的性が見られる。「天職」(Beruf)という言葉に見られるように、勤勉な労働それ自体に倫理的な価値が与えられるのである。

---

\*薬学部 第2英語教室

なぜなら、こうした場合には端的に高度の責任感が必要であるばかりか、少なくとも勤務時間の間は、どうすればできるだけ楽に、できるだけ働かないで、しかもふだんと同じ賃金がとれるか、などということ絶えず考えたりするのはなくて、あたかも労働が絶対的な自己目的—「Beruf」 「天職」—であるかのように励むという心情が一般に必要なからだ。しかし、こうした心情は、決して、人間が生まれつきもっているものではない。また、高賃金や低賃金という操作で直接作り出すことができるものでもなくて、むしろ、長年月の教育の結果としてはじめて生まれてくるものなのだ。(67)

以上に述べたヴェーバーの説を念頭において『フランクリン自伝』を読んでもみると、確かに、フランクリンが勤勉に働き、自らを向上させようと絶えず努力することを倫理的な生活規範としていたことが見て取れる。

例えば、スペクテイター紙の文章を手本として文章修行を行ったり(1319-20)、また、自分にとって必要な道徳(Virtue)を十三にまとめ、それらの十三徳を効率良く身につけるために、小さな手帳に表を作って、その週の課題として選んだ徳目が実践できたかを記録したことである。十三徳を具体的に挙げると、節制(temperance)、沈黙(silence)、規律(order)、決断(resolution)、節約(frugality)、勤勉(industry)、誠実(sincerity)、正義(justice)、中庸(moderation)、清潔(cleanliness)、平静(tranquility)、純潔(chastity)、謙譲(humility)である(1384-85)。以上の十三徳を見ると、欲望に溺れずに(「節制」「節約」「純潔」)、時間を有益に用いる(「勤勉」という禁欲的な生活信条が見て取れる。

欲望に溺れることは、人間を成功から遠ざける。例えば、フランクリンは、強いビールを大量に飲む印刷所の職工たちの習慣を否定し、「気の毒にもこうして職工たちは、いつまでたってもうだつが上がらないのである」(1348 松本・西川訳 75)と述べている。さらに、アメリカの先住民がラム酒を好む習慣についても、以下のように述べている。「まことに大地を耕作する者に場所を与えるため、これらの野蛮人を根絶することが神のみ旨であるならば、ラム酒こそ神の定め給うた手段であると思えないこともない。以前大西洋の沿岸地方に住んでいたインディアンは、すでに残らずこの酒のために亡びてしまったのである」(1422, 松本・西川訳 195)。

フランクリンは十三徳の樹立を自分の人生における重要な出来事とみなして、自伝中で十三徳樹立の過程を詳細に描いている。徳目を身につけることによって人間が苦難の多い人生を無事に渡り切っていく姿は、フランクリンが愛読していたジョン・バニヤンの『天路歷程』の影響を思わせる。

なお、フランクリンはバニヤンの文体についても以下のように高く評価している。「この誠実な著者ジョンは、私の知るかぎりでは、地の文と会話とを分けずに交ぜて書いた最初の人であるが、この方法は読者にとって非常に楽しい書き方であって、現に、もっとも興味深いところへ来ると、読者はいわば作中で行われている会話の席に仲間入りを許されたような思いがするのである」(1326, 松本・西川訳 37)。フランクリンは『自伝』において、以上のバニヤンのやり方を取り入れている。『自伝』を非常に楽しい書物にしている親しげな文体は、バニヤンの影響のもとで生まれたものであろう。

『天路歷程』の主人公が様々な試練を経て神の都に至ったように、フランクリンも『自伝』において、十三徳を身に付けることにより成功への道を歩んでいく物語として自分の人生を描いた。ヴェーバーの言うところの「倫理的な色彩をもつ生活の原則」は、フランクリンにとって、同時に世俗的な成功を保証するものである。

## 2. ギャツビーの二重性

フィッツジェラルドの長編小説『グレート・ギャツビー』の主人公であるジェイ・ギャツビーも、青年時代にフランクリンを連想させる禁欲的で勤勉な生活態度を理想として、そうした生活態度を身に付けるために努力していた。

ギャツビーの死後に葬式に来た父親は、ギャツビーが少年時代に持っていた本(『片足跳びキャシディ (Hopalong

Cassidy)』という西部劇小説)をニックに見せてくれる。その本の余白のページに「スケジュール」(schedule)と題した書き込みがあり、それには、起床、運動、勉強、仕事などの一日の時間割と共に、「時間を〔店などで〕浪費しないこと」「禁煙」「一日おきの入浴」「毎週一冊、有益な書物ないし雑誌を読むこと」「節約」「孝行」といった一般的決意が書き込まれていた(164)。

少年時代のギャツビーのこうした自己改革への意志は、彼が自分自身に対して高い理想を抱いていたことから生じた。彼は「自分自身に関してのプラトンの(理想主義的)観念」(his Platonic conception of himself)をもち、自分は「神の子」(a son of God)であると思っていた(95)。

しかし、現実には彼の理想とははなはだ異なっていた。彼の両親はふがいない、成功とは縁のない農民であり、彼の想像力は彼らを本当の両親とは認めていなかった(95)。

貧しいが想像力豊かな少年であったギャツビーは、自分自身に対する高い理想と惨めな現実とのずれという二重性を抱えていたのである。こうした二重性を解消するために、ギャツビーがとった手段が名前を変えることであった。ギャツビーの法律上の本名はジェームズ・ギャツ(James Gatz)であったのだが、十七歳の時に鉱山成金のダン・コーディーと出会った際にジェイ・ギャツビー(Jay Gatsby)という名を名乗り、それ以降はこの新しい名前を用いて生きたのである(94-95)。ジェームズ・ギャツという本名を棄てて、自ら考え出したジェイ・ギャツビーという名を名乗ることにより、従来の自分を捨て去り、自分は神の子であるという理想に沿った新しい自分を作り上げようとしたのだ。「そのようにして、彼は十七歳の少年が作りだし(invent)がちな種類のジェイ・ギャツビーという存在を作り上げ、この概念〔自分自身に関するプラトンの概念〕に対して最後まで忠実であった」(95)。

若く貧しい労働者であったギャツビーにとって、鉱山成金コーディーのヨットは「この世の全ての美と魅惑を表わす」ものだったのであり(96)、若いギャツビーの理想主義が金銭的な富の魅力と結びついてしまったことが注目される<sup>註1</sup>。

それからのギャツビーはコーディーと共にヨットで各地を旅する。やがてコーディーは亡くなるのだが、それまでにコーディーと過ごした経験という一種の教育期間を通じて、ジェイ・ギャツビーという新しく作り上げた観念的存在が実体を持った一人の人間となったのである。「〔コーディーの死後、〕彼にはとりわけ適切な教育が残された。ジェイ・ギャツビーという漠然とした輪郭しかもたなかった存在が、一人の男性としての実在性(substantiality)を持つまでに満たされていったのである」(97)。

しかし、ギャツビーが本名を棄ててジェイ・ギャツビーという新しい名前になったからといって、彼が抱えていた理想と現実の二重性という問題は解消されなかった。彼は相変わらず貧しい無名の青年に過ぎなかったのである。

彼は軍人になり、デイジーと出会って恋に落ちるが、結局のところ出征中にデイジーは金持ちのトム・ブキャナンと結婚してしまう。その後、デイジーを忘れられないギャツビーは金持ちになり、再びデイジーの前に姿を現す。豪邸で毎週盛大なパーティを開くギャツビーは、あこがれていた金銭的な富の魅力を実手にして、ここにおいて理想と現実は一一致し、彼が自ら作り上げたジェイ・ギャツビーという存在は完成したかのように見える。

しかし、デイジーへの愛情がひたむきである反面、ギャツビーの富は、闇の世界のギャンブラーであるマイヤー・ウルフシャイムとの交流によって築き上げたものであり、いかがわしい側面を持っていた。いわば、ギャツビーは、純粋な愛情と闇の商売の二重性を抱えていたのである。ウルフシャイムはギャツビーの死後、ニックに対して、「私が彼〔ギャツビー〕を作ったんだ」(I made him)とか「私が彼を無から、まさにどん底の生活から、育て上げたんだ」(162)とか語っている。

こうしたギャツビーという成金の存在にまつわるいかがわしさは、彼の家でのパーティに招待される客たちも感じ取っていたものであり、彼らは主人役であるギャツビーに対して様々な噂を立てる。例えば、「彼は〔敵国であったドイツの〕皇帝ウィルヘルムの甥あるいは従兄弟である」(35)とか、「以前に人を殺したことがある」(45)とか

「戦時中はドイツのスパイだった」(45) とか、の噂である。

ギャツビー自身は、そのような噂に対抗して、自分は中西部の裕福な家の息子であり、一族の伝統に従ってオクスフォード大学で教育を受けたなどと語り(64)、自分が「取るに足らない人間」(nobody)ではない事を主張する(66)。

しかし、結局のところ、ギャツビーの築き上げようとした理想像としての自分は、トムの手によって打ち砕かれてしまう。トムは最初からギャツビーのことをいかがわしく思い、「酒の密売人」(bootlegger)ではないかと疑っていたが(104)、第七章においてデイジーの目の前でギャツビーの闇の商売を暴き出し、ギャツビーがウルフシャイムとともにドラッグストアでアルコールを密売していたことなどを非難するのである(127)。

この破局の場面の後、ジョージ・ウィルソンによるギャツビー射殺という具合に、物語は急展開を迎える。ギャツビーという存在の内包する純粋な愛情と闇の商売の二重性は、破局ひいてはギャツビー自身の死へとつながる矛盾なのである。

ギャツビーのデイジーに対する愛情自体も、ひたむきで純粋であるがゆえに現実とのずれを内包している。ギャツビーにとってのデイジーとの恋愛は「聖盃の追及」(the following of a grail)に喩えられており(142)、果てのない理想の追求という象徴的な意味をもたされている<sup>#2</sup>。それだけに、ギャツビーの思いと現実の生身のデイジーとの間にはずれが生じうる。例えば、デイジーとトムとの間に生まれた子供の存在をギャツビーは認めようとせず、そのために初めてその子供を実際に見たときに呆然とする(111)。あるいは、デイジーが愛しているのは自分だけだと頑なに主張するギャツビーに対して、デイジーがトムのこともやはり愛していたと告白した時にも衝撃を受ける(126)。

ギャツビーがデイジーとトムとの夫婦としての生活を否定して、それ以前の自分とデイジーとの恋人時代に戻ろうとすることは、「過去を取り戻す」(repeat the past)という無謀な試みなのである。「あまり彼女〔デイジー〕に求めすぎない方がいい。過去を取り戻すことはできないよ」と忠告するニックに対して、「過去を取り戻すことができないだって？もちろんできるさ！」(106)と言い張るギャツビーは、時間の流れに逆行しようとする本来不可能な試みをしているのだ。そのような不可能なことを試みるギャツビーは、結局、現実には敗れて死ななければならない。ギャツビーという存在のもつ理想と現実の二重性は、ギャツビーという存在自体を維持不可能なものにしている。

### 3. デイジーにおける二重性

主人公ギャツビーの二重性と共に、ギャツビーの愛したデイジーもやはり二重性を抱えている。第一章において、語り手のニックはまたいとこの子であるデイジーに久しぶりに再会するが、その時のデイジーの笑い声を「馬鹿げていて、魅力的な小さな笑い声」(an absurd, charming little laugh)という表現で形容している(14)。デイジーという美しい女性の「魅力的な」(charming)笑い声が、同時に「馬鹿げた」(absurd)ものでもあることに注目したい。

また、同じ章で、デイジーは自分の娘が生まれたときのことを回想して、その時に看護婦に次のように語ったとニックに打ち明けている。「女の子で嬉しいわ。その子がお婆かさん(a fool)になってくれるといいのに。——女の子にとってこの世で一番いいのは、美しく可愛いお婆かさん(a beautiful little fool)になることよ」(22)。デイジーのこの台詞では、「美しい」ものが同時に「愚かしい」ものであるとされている。

デイジーにまつわる世界においては、美しく魅力的なものが同時に馬鹿げて愚かしいものだという不思議な等式が成立している。

そのようになる原因の一つとしては、トムとの結婚生活がうまくいっていないこともある。トムが愛人を作り、子供が生まれた時もトムが何処にいるのやら分からないような有様だったので、そのような中でも自分を不幸と感じな

いたためには、感受性を麻痺させた愚かな女になることを目標とするしかないのである。

しかし、美しさが愚かしさと並立するような二重性は、トムとの不幸な結婚生活という具体的状況を超えて、この作品においてもっと本質的なものであるように思われる。

第五章で、ギャツビーがデイジーと五年ぶりに再会し、彼女を自分の邸宅に招待して、豪華な家の内部を見せた上で、自分の買いためた沢山の高価な洋服を目の前に次々と積み重ねた時に、デイジーは感極まって泣き出す。「ほんとうに美しいシャツだわ。悲しくなるわ。だって、こんなに——こんなに美しいシャツを見たことがないもの (It makes me sad because I've never seen such—such beautiful shirts before.)」(89)。このデイジーの台詞においては、「美しさ」が「悲しさ」と結び付けられている。

ギャツビーが豪邸を買い高価な洋服を集めたのも、デイジーにそれらを見せたいためである。それらの美しいシャツにはデイジーに対するギャツビーの長年の思いがこめられているのだが、それが現実には実らないものである点に、この作品の本質的な悲劇性がある。

美しいものが同時に馬鹿げて愚かしく、そして悲しいものであること。美しいものは本質的に不安定なものであり、その不安定さの魅力を描き出した作品が、『グレート・ギャツビー』なのである。

#### 4. 二重性を生きる——夢の本質としての二重性

これまでに、ギャツビーとデイジーにおける二重性を論じたが、この二人以外の登場人物達も二重性を抱えている。

例えば、デイジーの夫であるトムは、金持ちであり美しい妻をめとり、元フットボール選手としての優れた肉体を持っていながら、結婚生活に安住できずに愛人を作り、しかもその愛人に平気で暴力を振るったりする。強い肉体の力を持っていても、それは「残酷な肉体」(a cruel body) (12) と形容されるように、コントロールを失っているのだ。トムの言動は、文明を擁護しながらも人種差別的な見解を露わにしたり (18)、家庭生活を守る発言をしつつ実際には愛人を作っていたり、などという滑稽な矛盾に満ちている。

また、トムの愛人であるマートル・ウィルソンにしても、活力を欠いて亡霊のような夫のジョージとは対照的に、強烈な「生氣」(vitality) (28) を宿した女性であるが、その有り余る「生氣」を有効に活かすことができない<sup>43</sup>。結局のところ、その「生氣」は彼女を夫に失望させ、トムとのいささか調子外れの恋に走らせるものであり、最後にはデイジーの運転する車の前に飛び出して引かれてしまい、「彼女がそれまで長い間ため込んできた途方もない生氣を吐き出し」て死ぬのである (131)。

トムもマートルも、強靱な肉体や強烈な生氣といった強さを持ちながらも、その強さがコントロールを失っているために、愚かしく、場合によっては自らを破滅させるものになってしまっているのだ。

さらに、語り手ニックにおける二重性は特に重要である。ニックはギャツビーに対して好悪両面の感情を持つ。ニックはギャツビーのいかがわしさを感じ取り、その成金趣味にも嫌悪感を抱くが、同時に、ギャツビーがデイジーに寄せる愛情の純粋さに心を打たれもする。第八章において、ギャツビーが自らの過去、特にデイジーとの恋についてニックに率直に語った時、ニックは深い感銘を受けて次のように叫ぶのだ。「あいつらは腐った連中だ。君はあの連中を寄せ集めたよりも価値がある」(146)。これは、ニックがギャツビーに対して与えた唯一の「誉め言葉」(compliment) (146) であり、ギャツビーの成金趣味のいかがわしさの下に隠れた「腐敗しない夢」(incorruptible dream) (147) の純粋さに感動したのである。

この感動があったからこそ、ギャツビーの死後の第九章において、ニックはギャツビーの唯一の味方としてその葬式のために奔走し(「私は自分が唯一人、ギャツビーの側にいることを発見した」(155-56))、やって来たギャツビーの父親に対して「私たちは親友でした」(159) と語るのだ。

以上のように、ニックがギャツビーに対して好悪両面の感情を持つことは、読者がギャツビーに対する共感を保ち

つつ、同情しすぎて過度の感傷に溺れないようにするために必要である。ニックの視点によって、読者はギャツビーの二重性を適度なバランスを持って受け止めることができるのだ<sup>4</sup>。

また、ニックの視点を通じて、ギャツビーの夢の二重性は単にギャツビー個人の性格にとどまらず、空間的・時間的に拡大される。例えば、空間的には東部と西部の二重性である。ニックもギャツビーも共に西部から東部に来た人間だが、西部の人間は東部の生活に適応できない部分があると最終章でニックは考える。「これは結局のところ西部についての物語 (a story of the West) だった、と今では分かる。——トムにギャツビー、デイジーにジョーダンに僕は皆西部人なのであり、おそらく僕たちには何か共通の足りないところ (deficiency) があって、そのために東部の生活に微妙に不適応になっているのだ」(167)。こうした登場人物たちは、東部と西部という矛盾した二重性を抱えて生きざるを得ないのである<sup>5</sup>。

さらに、同じ最終章において、ギャツビーの夢は時間的にも拡大され、アメリカの建国の英雄たちが抱いた夢に喩えられる。ギャツビーの葬儀に現われた父親は、息子について、「もしもあいつが生きていたら、偉大な人間になっていたことでしょう。ジェームズ・J・ヒル [アメリカの大鉄道業者] のような男に。あいつは国を作るのに役立っていたことでしょう」(160) と語り、また、少年時代のギャツビーの、フランクリンを連想させるような例の自己改善計画をニックに見せてくれる (164)。さらに、最終場面では、ギャツビーの抱いた夢が、オランダの水夫たちが新世界に対して抱いた夢に比べられる (171)。ギャツビーの夢は、アメリカという国を作り上げた根本となる夢の力に通じるものなのである。

しかし、ここでフランクリンとギャツビーとの違いにも注意しておかねばならない。フランクリンの場合は、理想を目指しての自己改善の努力は世俗的な成功と結びつくものであり、社会にも認められて有益な人生を送った。つまり、理想と現実のバランスがとれていたのである。しかし、ギャツビーの夢は理想と現実との矛盾を引き起こし、そうした矛盾した二重性の中でギャツビーは破滅していった。

だが、フランクリンのように夢と現実のバランスが取れる場合はむしろ稀であり、現実とのバランスを失わせるほどの途方もないエネルギーこそが夢の本質ではないだろうか。それゆえ、夢と現実の二重性は解消されることはなく、その二重性を抱えたまま生きざるを得ないのである。

フィッツジェラルドはそのような本質的な二重性を洞察し、夢の持つ美しさと悲しさを魅力的に描いて見せたのだ。

#### 【注】

1. ジョン・M・アレンは、ギャツビーを神の子キリストと比較した論考で、コーディとの出会いによって金銭的な美に魅せられたギャツビーについて、「彼の崇める神はマモン (富の邪神) であった」(108) と述べている。
2. リチャード・ルーハンは、ギャツビーの理想主義的傾向について、「ギャツビーは最後のロマン主義的主人公である」(12) と述べている。
3. おそらく、マートルは女優になればその「生氣」を十分に活用できたのではないかと、と思われる。例えば、彼女が愛人のトムと共にニューヨークのアパートに行った時、衣装を着替えることにより、その人格も変化し、内面の生氣が形を変えて外面に出ようになる (33)。この個所には、マートルという女性の持つ演技的性格が現われている。
4. また、ニックは容易に他人を批判することがなく、「〔他人に対する〕一切の価値判断を保留しがち」(7) であり、「数少ない正直な (honest) 人間の一人」(59) と自ら認める人物であるために、語り手として信頼できる。ただし、デイジーに対する見方について、ニックの男性中心主義的な傾向を指摘する論者もいる (Stoddart 105)。
5. ルーハンは、ギャツビーの西部人としての強烈なロマン主義的傾向が現実的な実りをもたらさなかった原因として、フロンティアの消滅に伴って、富の源泉が西部の大地から東部の都市へと移動したことを挙げている (34)。

【引用文献】

- Allen, Joan M. *Candles and Carnival Lights: The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald*. New York: New York UP, 1978.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1926. New York: Penguin Books, 1950.
- Franklin, Benjamin. *The Autobiography. Benjamin Franklin, Writings*. New York: Literary Classics of the United States, 1987. 1305-1470.
- Lehan, Richard. *The Great Gatsby: The Limits of Wonder*. Boston: Twayne, 1990.
- Stoddart, Scott F. "Redirecting Fitzgerald's 'Gaze': Masculine Perception and Cinematic License in *The Great Gatsby*." Jackson R. Bryer, Alan Margolies and Ruth Prigozy ed. *F. Scott Fitzgerald: New Perspectives*. Athens and London: U of Georgia P. 2000. 102-114.
- フランクリン, ベンジャミン『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳, 岩波書店, 2009年.
- ヴェーバー, マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳, 岩波書店, 1997年.